

【氏名】 竹村 幸祐

【所属大学院】(助成決定時) 北海道大学大学院 文学研究科

【研究題目】

「開かれた社会」の集団主義: 北米の集団間比較志向を支える社会的基盤の解明

【研究の目的】

本研究の目的は、北米人の集団主義的特徴とその背後にある要因を解明することにあつた。古くから北米社会は個人主義社会の代表格とみなされてきたが、実は東アジア人と変わらないほどに強い集団主義的傾向を北米人も持っていることがすでに明らかにされている(Oyserman, Coon, & Kemmelmeier, 2002)。さらに、北米の集団主義の大きな特徴として、自集団と他集団の比較に対する関心(集団間比較志向)の強さが指摘されている(Yuki, 2003)。北米における集団間比較志向の強さに関しては、日本とアメリカを比較した質問紙調査によって確認されているが(竹村・結城・Maddux, 2004)、日本とアメリカ以外の国での直接的検討はまだ行われていなかった。そこで本研究では、日本とカナダを比較する質問紙調査を実施した。また、この文化差が確かに存在するとして、その文化差の背後にある要因を解明するために、下に述べる仮説の検証を行った。

【研究の内容・方法】

集団間比較志向の文化差の原因として、本研究では、社会関係の流動性に注目した。これまでの研究で、社会関係の流動性は東アジアよりも北米で高く、北米では様々な人々と付き合う機会が多く存在していることが指摘されている(e.g., Yamagishi & Yamagishi, 1994; Yuki et al., 2007)。Frank & Cook (1995) によれば、資源や財を交換する「市場」の範囲が広い社会環境では、他者よりも相対的に優位な立場に立つことで得られる利益が非常に大きくなるとされている。このことから、社会関係が流動的で広い範囲での交流がある北米社会では、社会関係が固定的な東アジア社会でよりも、優位な立場に立つこと(=勝つこと)の利益が大きく、個々人の競争性が高くなっていると考えられる。さらに、過去の社会心理学的研究は、人間が他者と連合を形成して競争を行うことを示しており(e.g., Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1961/1988)、個人だけでなく集団を単位として競争が行われることを明らかにしている。このことから、北米では集団を単位とした競争が頻繁に行われ、そうした状況で有用な心理過程として高い集団間比較志向が北米社会に広がったと解釈することができる。この仮説が正しければ、北米では集団間比較志向が高いだけでなく、同時に個人間比較志向も高く、さらに、この2つの志向性は正の相関関係にあると予測される。この予測を検証するため、本研究では、集団間比較志向の尺度と個人間比較志向の尺度を日本とカナダで大学生を対象に実施した。

【結論・考察】

本研究の結果、日本とアメリカの比較に対応する結果が、日本とカナダの比較でも得られることが確認された。すなわち、自集団と他集団の比較に対する関心、つまり集団間比較志向は、日本よ

りもカナダで高かった。さらに、集団間比較志向だけでなく、個人間比較志向もカナダでより高かった。しかも、日本とカナダのいずれにおいても、集団間比較志向と個人間比較志向は正の相関関係にあった。また、媒介分析の結果、集団間比較志向の日加差は、部分的にはあるが、個人間比較志向の日加差によって説明されることが明らかになった。以上の結果は、北米の集団間比較志向の強さを示すとともに、集団間比較志向と個人間比較志向が共通の背景を持っていることを示しており、上述の仮説と一貫している。この調査結果は、まだ広く知られてはいない「北米人の集団間比較志向性」の新たな証拠を提供するとともに、その背後にあるメカニズムの解明にも寄与するものであった。